

50余年の歳月を経て行方沼東、倉田悟の短歌見つかる

遠山川北又澤伐採事業所視察者芳名録より

竹 重 聡*

この芳名録との出会いは、2006年の初夏、私が所属する「遠山山の会」の会長前澤憲道氏との雑談の中で、『半世紀も前の営林署の芳名録にシダと書かれたページがあるが、知っている人じゃないか?』と聞かれたことに始まった。

営林署で長く保管していた資料だった。昭和20年と書かれた芳名録の表紙を見て私は驚いた。約50年ぶりに出会ったのである。長時間の歳月に薬色の薄紙は所々変色し、毛筆だけが黒かった。はじの方の破れた箇所もあって、注意しながらページをめくって目にした二人のお名前に言いしれぬ感動を覚えた。行方沼東、倉田悟ご本人による、滞在先北又澤でのプライベートな毛筆の直筆であった。他のページは登山関係者がほとんどであった。どのような雰囲気の中でお二人が短歌まで書かれたかは、その時を知るよしもないが、何となくお二人の人の良さを偲ばせる内容であった。

日本シダの会を育てた初代会長行方沼東は、当時日本山岳会員でもあった。また詩人前田夕暮に師事していた。そして滞在先でカラクサシダをこの句に詠まれた。行方沼東の時58歳で詠んだ句である。

倉田悟はこの時32歳、東京大学助教授をされており、終始林学科森林植物学を担当していた。だから倉田悟は当地への思いを凝縮させて、トウヒとトラノオの名前を芳名録に記した。そして句の中にイッポンワラビを詠まれた。そこに若さと情熱的ひたむきさを私は感じた。

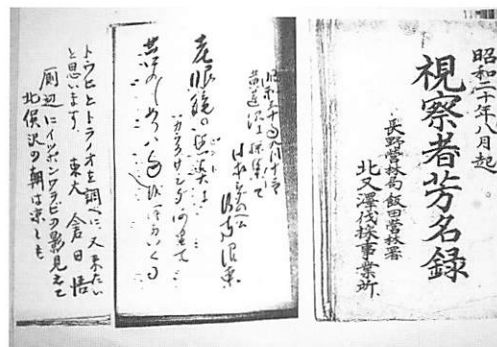
当時東京からこの北又澤まで足を伸ばすことはたいへんなことであった。昭和19年(1944年)に完成した梨本・大沢渡間19.6kmの遠山森林鉄道は梨本から北又澤伐採事業所のある黄連までは15km、終始緊張とスリルの連続であったと思われる。そしてこの頃森林鉄道は北又澤・西沢渡間10.9kmまでの本谷線が完成間近であり、昭和31年1月(1956年)に完成した。二人が訪れたのが昭和30年9月(1955年)、5ヶ月後のことである。そして昭和43年12月(1968年)に国有林材の搬送完了となり、実質森林鉄道の使命は終わるの

である。翌年から撤去となった軌道は昭和48年10月(1973年)に完了し、営林署北又澤伐採事業所は幕を閉じた。

遠山山の会は、長野県飯田市にある約30名の会員で組織された登山道整備・自然保護を中心にしたボランティアの会である。組織されてまだ約10年だが、南アルプスの南部に位置する聖岳・兎岳へのルート整備をはじめ、池口岳・鶏冠山そして地元の里山地域整備、地域活性化の推進力にもなっている。会では平成17年10月(2005年)、北又澤から大沢渡までの軌道ルートの調査を実施した経緯があり、往年の生活の痕跡として軌道敷周辺でレール、枕木、犬釘等を多数発見した。この時に、撤去から35年が経過しているため全線を単独で歩くことは極めて危険であると身をもって感じた。

今この谷は、軌道撤去後35年の時を経て生活する人々はもう居ない。猟師の数が減ったことが一因なのか、シカの大繁殖によって、常緑樹や常緑性草類のほとんどが食されてしまった。これは全国的にも危惧する問題であり、この地方でも早急に地域を取り込んでシカの頭数制限を実践しなければならないと考える。この食害により既に多方面にわたって悪影響が出てきた。

森林鉄道は消えてしまったが、今回当時のこのよう



な芳名記録が見つかってお二人の先生に出会えたことは、地域で出来る活動を地道に行動してきたことによる縁の賜だと感じた。そして芳名録原図は大切に保管して下さるよう前澤会長にお願いした。これはその

* 竹重 聡 〒381-2246 長野市丹波島2-16-3

芳名録の表紙と詠まれた短歌のページを撮らせて頂いた写真である。

この芳名録が伐採事業所の記帳台に置かれたときから、既に60年以上の歳月が経過した。営林署で保管された芳名録が偶然人前に現れて、記帳後50余年の時を

経た。

参考文献

片岡俊夫 (2004) 「遠山」 森林鉄道と山で働いた人々の記録, 南信州新聞社。